

## シッダセーナ・ディヴァーカラ著『聖賢の論理』和 訳研究（1）

原田，泰教  
九州大学大学院人文科学研究院哲学部門

<https://doi.org/10.15017/10303>

---

出版情報：哲學年報. 67, pp.91-111, 2008-03-01. 九州大学大学院人文科学研究院  
バージョン：  
権利関係：

# シッダセーナ・ディヴァーカーラ著 『聖賢の論理』 和訳研究 (1)

原 田 泰 教

本稿はジャイナ教の学僧シッダセーナ・ディヴァーカーラ (Siddhasena Divākara, 紀元後5世紀頃)<sup>1)</sup> 著『聖賢の論理』 (*Sammati-tarka-prakarana*) の和訳研究である<sup>2)</sup>。著者シッダセーナはジャイナ教論理学期の中でも萌芽期に位置し、ジャイナ教の聖典期から論書全盛期に至るまでの橋渡しの作品を残した点で注目すべき人物である<sup>3)</sup>。特に、ジャイナ教の中心的思想である相対主義 (anekāntavāda) を、ジャイナ教独自の論法である視点法 (naya) や七文陳述法 (saptabhaṅgī) を用いて証明しようとした点が<sup>4)</sup>、他学派との論争の上で比較的明快な論法であるニクシェーパのみを用いたハリバドラ・スーリ (Haribhadra Sūri, 紀元後8世紀頃) などと異なっている<sup>5)</sup>。

## 【『聖賢の論理』 著者問題】

従来、『聖賢の論理』、『論理学入門』 (*Nyāyāvātāra*)<sup>6)</sup>、『三十二偈論集』 (*Dvātriṃśikā*) の三作品が、シッダセーナの著作とされてきた。A.N. Upadhyeも、Upadhye [1971] においてこれらの著作をまとめて収録している<sup>7)</sup>。

しかし、一人の著者がこれら三種の哲学書を著す際に、プラークリットとサンスクリットというように、使用言語を使い分けることは考えにくい。つまり、『聖賢の論理』はプラークリットの韻文で書かれているが、『論理学入門』、『三十二偈論集』はサンスクリットで書かれている。同一人物がプラークリットとサンスクリットを使用していたとしても、その場合は著述内容を明確に区別している<sup>8)</sup>。さらに、承認していた正しい認識手段の数、あるいはジャイナ教の相対主義を証明するための手法が異なるという点で、『聖賢の論理』の著者とそれ以外の二著作の著者は別人であると考えられている<sup>9)</sup>。

### 【所属学派について】

シッダセーナの所属学派は未確定である。最も有力な説はヤーパニーヤ (Yāpaniya) 学派に所属するとする説である。ジャイナ教の学派は空衣派と白衣派に大別されるが、第三の学派としてヤーパニーヤ学派が考えられている。現在のところ、『女性の解脱についての作品』 (*Strinirvāṇaprakaraṇa*)、『一切知者の食事についての作品』 (*Kevalibhukti prakaraṇa*) がこの学派によって書かれたとされる。また、空衣派に属するとされている *Mūlācāra*、*Bhagavati-ārādhana* も、ヤーパニーヤ学派の人物によって書かれたとされる<sup>10)</sup>。『聖賢の論理』第一章第4偈で見られるように、空衣派・白衣派が認めているナヤの種類とシッダセーナが説くナヤの種類が異なっていることから、彼の所属学派が空衣派・白衣派いずれにも属さない学派であるということを想定できる。シッダセーナの所属学派については、全訳が終了してから再考することとする。

最初に、『聖賢の論理』の原典出版及び諸研究について確認しておきたい。

### 【原典出版】<sup>11)</sup>

- 1\*. *Sammati-sūtram*, Pothi edition, folios 28-33, published by Śrī Jaina Dharma Prasāraka Sabhā (JDPS) No.14, Bhavnagar, 1909.
- 2\*. *Sammati-sūtram*, Part I, with the commentary of Abhayadeva in *the Yaśovijaya Jaina Granthamālā*, Benares, 1910.
3. Siddhasena Divākara: *Sammati-tarka-prakaraṇa with Abhayadevasūri's Tattvabodhavidhāyini*. Ed. by Sukhlāl Saṅghavi and Becardas Doṣi, Ahmedabad, 1924-1931; (vol.1 & 2, RBTS 6-1,2, Kyoto 1984.)

92

SaṅghaviとDoṣiが、アバヤデーヴァによる注釈 *Tattvabodhavidhāyini* と共に、1924-1931年に順次、原典出版を行った。合計5巻からなり、最初

の4巻は*Sammatitarkaprakaraṇam*と題して出版されたが、彼ら自身の考察によって、第5巻は*Sanmatiprakaraṇam*と変更されている。

4. *Siddhasena Divākara's Nyāyāvatāra and with the Vivṛti of Siddharsi as well as the Text of 21 Dvātriṃśikās and the Sammaī-Suttam, Vinayavijaya's Nyāyakarṇikā*, ed. by A.N. Upadhye, Bombay, 1971.

Upadhyeが、従来シッダセーナの著作とされてきた『聖賢の論理』、『論理学入門』、『三十二偈論集』の原典を一冊に収録し、詳細な序文の中でシッダセーナの著作出版史や現代の研究論文等を網羅的に掲載している。また、A、Bという二種の異読を挙げつつ、『聖賢の論理』の原典を提示している。A、Bが写本であるのか版本であるのか不明である。

【翻訳・研究】

1. Sanmati Prakaraṇa, Ācārya Siddhasena Divākara praṇīta, S. Saṅghavī and B. Doṣī, *Śrī Pūmjāi Jaina Granthamālā* 6, 1932.

上記刊本3.の校訂者自身の手によって、1932年に原典本文とグジャラーティー訳が出版された。これには、著者シッダセーナの年代等が序文において詳細に説明されている。しかし、翻訳は必ずしも全てが逐語的な訳ではなく、「意識」に近いものである。

2. *Siddhasena Divākara's Sanmati Tarka with a critical introduction and an original commentary*, by Pandita Sukhlalji Saṅghavi and Pandita Bechardasji Doshi ; translated from Gujarati : Introduction by Prof. A. B Athavle M. A. ; text and commentary by Prof. A. S. Gopani M.A. ; edited by Pandita Dalsukh Malvania, 1939. (repr. *Pt. Shri Sukhalalji granthamala* ; no. 5, 2000)

AthavleとGopaniは上記グジャラーティー訳を英訳し、1939年に出版した。

3\*. *Sanmati-prakarāṇa*: A Hindi Translation and incorporating some revision by Pt. Sukhalalji, (published) by S.M. Jain, Jñānodaya Trust, Ahmedabad, 1963.

上掲書 1. のヒンディー語訳である。

4. 【原典出版】 4. に同じ。

5. *Sammai Suttaṃ of Āyariya Siddhasena, edited with Hindi Translation, Explanatory Notes, Introduction, Appendices and Index*, by Devendra Kumār Śāstrī, Neemuch, 1978. (rep. New Delhi ; *Bhāratīya Jñānapīṭh Mūrtidevī-granthamālā*, no. 23, 2003)

D.K. Śāstrī は本文原典、サンスクリットへの還元であるチャーヤーと、ヒンディー語による説明を付して1978年に出版した。

6. 藤永伸『ジャイナ教の一切知者論』平楽寺書店（部分訳）

『聖賢の論理』第二章（全43偈）のうち、一部が一切知者研究の立場から部分的に翻訳、研究がなされている。第二章では一切知者の知と見が集中的に議論されるからである。第二章の約半分である22偈について、正確な翻訳が提示されている。

以上、本文・注釈の原典は出版され、また逐語的でない英訳は行われているが、詳細な研究及び完全な和訳は未出版である。従って、『聖賢の論理』の全訳を行うことによって、ジャイナ教相対主義の一端を順次明らかにしたいと考える。聖典期と、仏教との論争により発展する論理学期の中間を埋める意味で、本書の翻訳は極めて重要である。以下に『聖賢の論理』第一章の前半約半分の翻訳とその解説を提示することにより、本書の内容紹介をする。

【和訳研究】

第一章 「ナヤの章」

- 【1. 特定の功徳を伴ったジャイナ教の預言者 (prophet) の教説の賛辞の形をとった帰敬偈】

siddham siddhatthāṇaṃ ṭhāṇaṃ aṇovamasuham uvagayāṇaṃ /  
kusamayavisāsaṇaṃ sāsaṇaṃ jīṇāṇaṃ bhavajīṇāṇaṃ //1-1//

①成就したものであり、②目的を成就した者たちの場所であり、③求める人々にとって比類なき楽であり、④誤った教義を打ち負かしたところのものが、[輪廻という] 存在を打ち負かしたジナ達の教えである。

【解説】 インド文献の冒頭では、一般に、具体的な内容に入る前に「帰敬偈」と呼ばれる賛辞が述べられる。この作品では、ジナ達の教義への賛辞となっている。ジナとは、第3偈で言われるティールタンカラと同義であり、ジャイナ教では開祖マハーヴィーラ及び彼に先行する23人の一切知者を含めて、合計24人のティールタンカラがいたとされる。

注釈者アバヤデーヴァはṭhāṇaṃ aṇovamasuham uvagayāṇaṃでひとまとまりと考え、その場合の三種類の解釈方法について詳しく述べている。しかしここでは、siddhatthāṇaṃ がṭhāṇaṃを修飾していると考えた。そうでなければ、siddhatthāṇaṃという語が、文全体においてどの語を修飾するのか曖昧になるからである。

また、「ジナ達の教え」とは、アバヤデーヴァによれば、ジャイナ教の12の最も重要な聖典 (アング) のことである<sup>12)</sup>。

- 【2. 『聖賢の論理』という作品著述の宣言とその目的】

samayaparamatthavittharavihāḍajaṇapaḍḍāvāsāṇasayaṇṇo /  
āgamamalārahiyao jaha hoi tam attham uṇṇesum //1-2//

聖典に対して愚鈍な心を持つ人が、聖典の最高の意味の詳細を述べる人を尊敬することにより奉仕するように、私 (シッダセーナ) はその意味

を述べる。

【解説】 ここでは、シッダセーナが、自らの著述を始めるにあたって、自らの能力を謙遜して述べている。つまり、聖典（āgama）に対して十分な知識を持たない者でも聖典の意味を述べるために努力することが見受けられるから、彼自身も十分に知識を持ち合わせていないながらも、この『聖賢の論理』を述べることを説明している。

【3. この作品の主な主題を提示する】

titthayaravayaṇasaṃgahavisesapatthāramūlavāgaraṇī /  
davatṭhio ya pajjavaṇao ya sesā viyappā siṃ //1-3//

ティールタンカラ達の言葉の一般的な面と個別的な面の詳細を、根本的に説明するものは、〈実体を主とする [ナヤ]〉と〈様態を [主とする] ナヤ〉である<sup>13)</sup>。残りのもの（ナヤ）は両者の下位分類である。

【解説】『聖賢の論理』の主題がここで提示される。帰敬偈ではジナ達の教えと言われたが、ここではティールタンカラ達の言葉と言い換えられている。

彼らの言葉を分析的に説明するものとして、〈実体を主とするナヤ〉（dravyārthikanaya）と〈様態を主とするナヤ〉（paryāyārthikanaya）が立てられる。しかし、空衣派ジャイナ教徒クンダクンダは世俗的観点（vyavahāra-naya）と究極的観点（nīścaya-naya）という二分類をなすし、空衣派・白衣派両派に認められているジャイナ教の綱要書、ウマースヴァーティの『真理証得経』は、空衣派が7種、白衣派が5種と、学派によってもナヤの数が異なっている<sup>14)</sup>。ジャイナ教が伝統的に主張してきた視点（ナヤ）にも多様性があると言える。

ここで述べられているのは二種のナヤ、すなわち〈実体を主とするナヤ〉と〈様態を主とするナヤ〉であるが、原文は〈実体を主とする [ナヤ]〉と〈様態を [主とする] ナヤ〉である。〈様態を主とする [ナヤ]〉

(pajjavattiya) ではなく、〈様態のナヤ〉(pajjavanāya) という不自然な省略語が使用されていることについて、アバヤデーヴァは、「韻律が崩壊することを恐れて」、としている<sup>15)</sup>。

〈実体を主とするナヤ〉と〈様態を主とするナヤ〉の原語はそれぞれ、davvaṭṭhiyaṇaya, pajjavatṭhiyaṇayaである。サンスクリットに当てはめれば、dravyārthikanayaとpariyāyārthikanayaである。しかし、第3偈の英訳中で使用されている原語はそうになっているものの、それ以外の箇所では、dravyāstikanayaとpariyāyāstikanayaとなっている。dravya-arthika-nayaであれば、〈実体を主とするナヤ〉、dravya-astika-nayaであれば、〈実体だけが存在するとするナヤ〉と訳することが可能である。

ジャイナ教の存在論では、常住なる実体と変化する様態の共存が考えられている<sup>16)</sup>。そのそれぞれに対応して視点(ナヤ)が存在するので、視点の数は二種になる。

実体に相当する語は、本書ではdavvaとdaviyaが使用されている。いずれもサンスクリットではdravyaである。韻律の都合によって両者が使い分けられたと考えられるが、daviyatṭhiyaṇaya\*という語は全く使われておらず、この複合語を形成する際にはdavvaしか使われなかったものと考えられる。

【4. 〈実体を主とするナヤ〉の下位分類。純粋なものと同様でないもの】

davvaṭṭhiyaṇayaṇapayaḍi suddhā saṃgahaparūvaṇāvisao /  
paḍirūve puṇa vayanatthañicchao tassa vavahāro //1-4//

〈実体を主とするナヤ〉の[対象の]本質は、純粋なものであり、〈まとめる [ナヤ]〉で説明されるものの対象である。さらに、影のものに関して、言葉の意味内容(ārtha, vācya)を決定する、それ(〈実体を主とするナヤ〉)の中の、〈実践的な [ナヤ]〉がある。



【解説】 paḍirūvaの解釈について、サンスクリットではpratirūpaとなる。アバヤデーヴァによる第一解釈はpratirūpaṃ pratibimbam pratindihīとなり、鏡像、幻という理解である。前半が〈まとめるナヤ〉の主な性質であり、それは「純粹」であると解釈される。一方、第二解釈はpratiを前置詞的に解釈する読み方で、「個物ごとに」と理解する場合である。rūpaṃ rūpaṃ prati, vastu vastu prati yoと解釈される。ここでは、第一解釈を採用した。

本偈では、〈実体を主とするナヤ〉と〈様態を主とするナヤ〉のうち、〈実体を主とするナヤ〉の下位分類が述べられている。すなわち、〈実体を主とするナヤ〉には〈まとめるナヤ〉と〈実践的なナヤ〉がある。両者はともに、同一性を導く視点であるが、〈まとめるナヤ〉のほうがより究極的な同一性を言い、〈実践的なナヤ〉のほうが限定的な同一性を述べている。

ジャイナ教のナヤは、一般に七種に分けられる。すなわち、実体に関するナヤが三種 (naigama, saṃgraha, vyavahāra)、様態に関するナヤが四種 (rjusūtra, śabda, samabhirūḍha, evambhūta) である。しかし、実際にはこのような体系にまとめられるのには時間を要しており、ナヤとして認められる項目の数は、所属学派を決定する根拠ともなりうる。

ウマースヴァーティの『真理証得経』においても、両学派が承認するナヤの数は異なり、空衣派が7つのナヤすべてを認めるのに対して、白衣派は最初の5つのみを認めている。両学派それぞれで伝持する『真理証得経』を比べれば、ほとんどの箇所一致しているが、ここでは明確な違いが見て取れる。そこで、シッダセーナの所属学派が問題となるが、特筆すべき事柄として、シッダセーナは〈実体を主とするナヤ〉の最初に挙げられるnaigamaをナヤの一つとして数えていない。注釈者アバヤデーヴァ<sup>17)</sup>は第一章第3偈の「残りのもの」の説明として、naigama等と述べている。アバヤデーヴァに従えばシッダセーナもnaigamanayaを認めていたことになる。しかし、彼自身は『聖賢の論理』全体をみてもnaigamaの存在を認めておらず、シッダセーナとアバヤデーヴァの間には500年程度の年代差があり、シッダセーナの意図が正確に伝えられているかは疑わしい。

仮に、シッダセーナの説を独立した固有の説としてみなせば、シッダセーナの立場は空衣派・白衣派いずれにも属さないことになり、彼がヤーパニーヤ学派に所属したという学説が補強されることになる。

偈頌で述べているように、〈まとめるナヤ〉は純粋なものである。それに対して〈実践的なナヤ〉は純粋でないものである。これらの区別によって、〈実体を主とするナヤ〉には二種の下位分類がある。

#### 【5. 〈様態を主とするナヤ〉の下位分類】

mūlaṇimeṇaṃ pajjavaṇayassa ujjusuyavayaṇavicchedo /  
tassa u saddāiā sāhapasāhā suhumabheyā //1-5//

〈様態を主とするナヤ〉のうち、根本にあるものは、〈現在の事柄 [というナヤ]〉という叙述する言葉を決定することである。一方でそれ（〈現在の事柄というナヤ=幹〉）には、〈語に由来するナヤ〉等の枝・小枝である微細な区別がある。

【解説】 〈様態を主とするナヤ〉の下位分類が述べられる。〈様態を主とするナヤ〉のうち、根本にあるものは〈現在の事柄というナヤ〉であり、〈語に由来するナヤ〉等の三つのナヤはさらにその下位分類となる。

サンガヴィ氏の解説によれば、〈語に由来するナヤ〉は、〈現在の事柄というナヤ〉の視点を受け入れた上で、人物や性別の視点も加わる<sup>18)</sup>。

〈同義語に由来するナヤ〉は同一の王に対しても、ラージャ (rāja)、ヌリパ (nrpa) といくつもの呼び名があることを言っている。

〈働きに由来するナヤ〉は、同一の語であっても、その語の元となった動詞に基づいている場合と基づいていない場合とで相違があるとしている。例えば、王を指す語rājaは、輝くという意味の動詞√rajに基づいているが、実際に王が政治的な意味で輝いている場合でも、輝いていない場合でも、「王」と呼ばれることを示している。

ここでは、〈様態を主とするナヤ〉の分類が、樹木に喩えられている。すなわち、〈現在の事柄というナヤ〉を幹として、〈語に由来するナヤ〉、〈同

義語に由来するナヤ)、〈働きに由来するナヤ〉がそれぞれ枝、小枝、さらに小さな枝と言われている。一般に、〈様態を主とするナヤ〉の下位分類として、〈現在の事柄というナヤ〉、〈語に由来するナヤ〉、〈同義語に由来するナヤ〉、〈働きに由来するナヤ〉という四つのナヤが並列的に置かれる。しかし、『聖賢の論理』においては、〈現在の事柄というナヤ〉が最も根本的なものとされ、〈語に由来するナヤ〉等、それ以外のナヤはより細かい分類として位置づけられる。本書で描写されるナヤ説のひとつの特徴であると言える。

#### 【6. ニクシェーバの種類と主要なナヤの分類】

nāmaṃ ṭhavaṇā davie tti esa davvaṭṭhiyassa ṇikkhevo /  
bhāvo u pajjavaṭṭhiassa parūvaṇā esa paramattho //1-6//

①名称と②表象と③実体というニクシェーバは、〈実体を主とする [ナヤ]〉の観点からのものである。一方で、④状態というニクシェーバは〈様態を主とする [ナヤ]〉に属する言及である。このことが最高のものである。

【解説】 ここで述べられるニクシェーバはジャイナ教聖典の解釈で使用されるニクシェーバと同じものであり、後代ハリバドラ等が使用する実体・場所・時間・状態というニクシェーバとは構成内容が異なっている。ここから言えることは、『聖賢の論理』の著者としてのシッダセーナは、ハリバドラ等とは異なった方法を用いてスヤードヴァーダの思想を表そうとしたということである。

しかし、ニクシェーバであると明言してはいないが、シッダセーナは他のニクシェーバをも知っていたと考えることが出来る。すなわち、『聖賢の論理』第三章第60偈において次のように述べられる。

①実体、②場所、③時間、④状態、⑤様態、⑥範囲、⑦結合、⑧相違に依存して、正しく諸存在を知らしめる様態がある。(3-60)

ここでは、ニクシェーパのもうひとつの組み合わせである、①実体、②場所、③時間、④状態が見られる。これら四種は、ハリバドラが受け入れたニクシェーパに他ならない。シッダセーナは、第6偈で述べられるニクシェーパだけではなく、ハリバドラが受け入れたニクシェーパをも肯定的に受け入れていると考えることが出来るのではないかと考えられる。

【7. それぞれのナヤの範囲と様々な言明の中でのナヤの分類】

pajjavanissāmaṇṇaṃ vayaṇaṃ davvatṭhiyassa atthi tti /  
avaseso vayanavihī pajjavabhayaṇā sapaḍivakkho //1-7//

〈実体を主とする [ナヤ]〉に属する、「存在する」という言明は、様態と共通性を持たない。残りすべての言葉の区分は、様態を共有しているから、実在ではない。

【解説】 d パーダで使われるsapaḍivakkhoは、サンスクリットに置き換えれば、satpratipakṣa、あるいはsapratipakṣaである。前者で解釈すれば、satのpratipakṣaであるからasat、つまり「非存在」である。sapratipakṣaと解釈した場合でも、「反対のものをもつ」という意味となり、偈頌全体としてみれば、相違はない。

存在する事物に関して言えば、何らかの名称や状態の違いはあれ、存在することは確定的であり、何らかのものが「存在する」ということが間違いないと言える。しかし、どのようなものであるかには言及されない。一方でどのようなものかということだけでは、それが存在するかどうかには言及できず、様態だけが単独で存在することはない。二つのナヤは、相互補完的であることを示している。

【8. 二つの主要なナヤの重複が起こる中での状況】

pajjavanāyavokkaṃtaṃ vatthuṃ davvatṭhiyassa vayanijjaṃ /  
jāva daviovaogo apacchimaviyappaṇivvayaṇo //1-8//

〈様態 [を主とする] ナヤ〉を離れた事物が、〈実体を主とする [ナヤ]〉

について語られるべきである。実体という意識はそれ以上の分別が働かない、という限りにおいて。

【9. 二つの主要なナヤの重複についての議論の要約】

davvaṭṭhio tti tamhā ṇatthi ṇao ṇiyamasuddhajāo<sup>19)</sup> /  
ṇa ya pajjavatṭhio ṇāma koi bhayaṇāya u viseso //1-9//

従って、全く純粋な〈実体を主とするナヤ〉は存在しない。また、[全く純粋な]〈様態を主とする [ナヤ]〉もまた存在しない。[話者の] 意図に基づいて、相違がある。

【10. 他のナヤに対するそれぞれのナヤの態度】

davvaṭṭhiyavattavvaṃ avathu ṇiyameṇa pajjavaṇayassa /  
taha pajjavavatthu avatthum eva davvaṭṭhiyaṇayassa //1-10//

〈実体を主とする [ナヤ]〉によって語られるべきものは、〈様態を [主とする] ナヤ〉の限定によれば必ず、非実体である。同様に、〈様態 [を主とするナヤ]〉としての事物は、〈実体を主とするナヤ〉にとっては非実体に他ならない。

【解説】 〈実体を主とするナヤ〉と 〈様態を主とするナヤ〉は相互補完的であるが、同時に排他的な関係にある。したがって一方の観点から見て実在するものは、他方の観点から見れば非実在となる。

【11. 両方のナヤは単一の、そして同じモノの異なる側面に触れる】

uppaṇṇāṃti viyaṃti ya bhāvā ṇiyameṇa pajjavaṇayassa /  
davvaṭṭhiyassa savvaṃ sayā aṇuppaṇṇam avināṭṭhaṃ //1-11//

諸存在物は〈様態 [を主とする] ナヤ〉からすれば、必ず生起し、消滅する。〈実体を主とする [ナヤ]〉からすれば、全てのものは常に生起せず、消滅しない。

【解説】 事物を時間的観点から見た場合、様態の点では生滅し変化するものであっても、実体の点では変化しない。ジャイナ教の存在論では変化し、かつ変化しないという、一見すると矛盾すると思われる概念の共存を認めている。

## 【12. 実在の特徴】

davvaṃ pajjavaviuṃ davvaviuttā ya pajjavā ṇatthi /  
uppāyattḥiibhaṃgā haṃdi daviyalakkhaṇaṃ eyaṃ //1-12//

様態を離れた実体は存在せず、また、実体を離れた様態は存在しない。周知のように、生起と存続と消滅は実在の特徴である。

【解説】 ここでは、二つの事柄が述べられる。まず第一に、実体と様態は不可離である。実体のみが存在したり、様態のみが存在することはない。実在物には両者の共存が見られる。第二に、実在の特徴として生起・存続・生滅が挙げられている。これは『真理証得経』5.29において「実在とは生起と消滅と存続と結びついたものである。」とされているのと同じである<sup>20</sup>。ところで、この偈では前半と後半で意味の異なるdravyaが使用されている。すなわち、前半のdravyaはparyāyaと対になって使用される語であり、後半のdravyaはsatと同義であり、いわば、狭義のdravyaとparyāyaをあわせたものである。

## 【13. これら両方のナヤがどのようにして誤るかの説明】

ee puṇa saṃgahao pādikkam alakkaṇaṃ duveṇṇaṃ pi /  
tamhā micchādiṭṭhi<sup>21</sup> patteyaṃ do vi mūlaṇayā //1-13//

また、これら（生起・消滅・存続）は集まっている。両方〔のナヤ〕はばらばらであれば、それぞれ定義するものではない。それゆえに、二つの根本的なナヤがそれぞれ存在するというのは誤った見方である。

103

【解説】 第12偈において、実体と様態が不可離関係をなしつつ事物に存在す

ることが言われた。それに対応して〈実体を主とするナヤ〉と〈様態を主とするナヤ〉が存在する。したがって、いずれか一方のナヤだけが存在することはありえない。

【14. 両方のナヤが正しいと見做される時の説明】

na ya taio atthi ñao ña ya sammattaṃ ña tesu paḍipunṇaṃ /  
jeṇa duve egaṃtā vibhajjamāṇā aṇegaṃto //1-14//

さらに、第三のナヤは存在しない。両者には、完全な正しさが無いという事はないことが確立される。なぜなら二つの極端な[ナヤ]が結びつけられれば、非絶対[的立場]であるからである。

【解説】 ナヤは根本的には〈実体を主とするナヤ〉と〈様態を主とするナヤ〉に限られるので、第三のナヤは存在しない、と念を押している。根本ナヤは両者で完結する。

シッダセーナと同じく非絶対説を説いたハリバドラの著作において、絶対的立場とは、排斥されるべき、他学派の学説である。しかし、ここでは〈実体を主とするナヤ〉と〈様態を主とするナヤ〉という、全く別のものを指すとはいえ、両方の絶対的立場を肯定的に受け入れていることは注目すべきであろうと考える。二つのナヤを用いることによって、非絶対的立場へと到達することが出来る。ジャイナ教の代表的思想としてナヤと非絶対説があげられるが、両者の関係がここで述べられるのは特筆すべきであろう。

【15. これら二つの主要なナヤのうち正しいものは、それらの分類においても正しい】

jaha ee taha aṇṇe patteyaṃ duṇṇayā ṇayā savve /  
haṃdi hu mūlaṇayāṇaṃ paṇṇavaṇe vāvaḍā te vi //1-15//

これら [二つのナヤ] が、個別には誤ったナヤとなるように、他のナヤも [個別には] すべて [誤ったナヤとなる。] 周知のように、根本ナヤ

を知らしめる場合に、それら [すべてのナヤ] もまた、覆われている。

【解説】 ジャイナ教において、ナヤには様々な種類があるが、〈実体を主とするナヤ〉と〈様態を主とするナヤ〉に集約される。従って、根本ナヤが個別に成り立ち得ないのであれば、それ以外の諸々のナヤも同様に個別には成り立ち得ない。根本ナヤとそれ以外のナヤとの主従関係を示している。

【16. いずれの一つのナヤも、実体を全体として理解するのに十分でない】

savvaṇayasamūhammi vi ṇatthi ṇao ubhayavāyapaṇṇavo /  
mūlaṇayāṇa u āṇaṃ patteyaṃ<sup>22)</sup> visesiyāṃ biṃṭi //1-16//

あらゆる [下位の] ナヤの集まりにおいても、両方の説を決定するナヤはない。[二つの] 根本のナヤによって示されたものを、それぞれの、限定されたものを、[あらゆるナヤは対象と] するからである。

【解説】 ここでも根本ナヤとそれ以外のナヤとの関係を述べている。根本ナヤは他のナヤよりもより根源的であり、他のナヤが集まったとしても根本ナヤに及ばないということである。根本ナヤの優位性がここでも示されている。

【17, 18, 19, 20, 21. 私たちはこの現世、幸福、悲惨さ、束縛、解脱を説明できない】

ṇa ya davvaṭṭhiyapakkhe saṃsāro ṇeva pajjavanayassa /  
sāsayaviyattivāi jamhā uccheavāi //1-17//

輪廻は〈実体を主とする [ナヤ]〉の立場では存在しない。〈様態 [を主とする] ナヤ〉でも [存在し] ない。[前者では] 個物は常住であるという主張となり、[後者では] [個物は] 断滅するという主張になるからである。



【解説】 ジャイナ教の立場によれば、輪廻及び解脱の思考法を成り立たしめるためには、〈実体を主とするナヤ〉と〈様態を主とするナヤ〉の両方が必要である。すなわち、生命原理としてのジーヴァは、幾世にも渡って存続しなければ、悪しきカルマの蓄積やそのカルマからの脱却を継続に行うことが出来ない。その一方で、変化する側面としての様態があるからこそ、ジーヴァは様々な形態をとって輪廻世界をさ迷うのである<sup>23)</sup>。

また、常住論と断滅論は、仏教やジャイナ教においては極端な説として古くから排斥されてきた。仏教中観派の開祖であるナーガールジュナは常住論と断滅論を排斥しており、ジャイナ教の相対主義と中道の思想は、非常によく似た思想であると言えよう。

suhadukkhasaṃpaogo ṇa jujjae ṇiccavāyapakkhammi /  
egaṃtuccheyammi ya suhadukkhaviyappaṇaṃ ajuttaṃ //1-18//  
[絶対的に] 常住であるという主張においては、楽や苦との結びつきが妥当でない。また、絶対的に断滅する [という主張] においては、楽・苦という考えが妥当ではない。

【解説】 前の偈頌のśāśvatavyaktivādaが本偈のnityavādapakṣaに相当し、ucchedavādaがekāntocchedaに相当する。常住論、断滅論いずれの場合でも問題が生じることを、帰謬論的観点から主張している。

kammaṃ jogaṇimittaṃ bajjhai baṃdhaṭṭhii kasāyavasā /  
apariṇaucchiṇṇesu ya baṃdhaṭṭhiikāraṇaṃ ṇatthi //1-19//  
[身体・言葉・心の] ヨーガを原因とする業[身]は束縛される。[四つの] 煩惱によって、束縛が確立される。変化しない [=常住である] 場合や、断滅する場合には、[輪廻への] 束縛及びその存続の原因はない<sup>24)</sup>。

【解説】 ジャイナ教における三つの行為とは、身体・言葉・心である。この三つは仏教における分類と同じである（身口意の三業）。これら三つの行

為によって精神原理であるジーヴァは輪廻に束縛されるが、これらの行為を抑制し、新たな業の漏入を妨げ、既にある業を滅することで、解脱へと向かう。

ジャイナ教の四つの煩惱 (kaṣāya) とは、怒り (krodha)、慢 (māna)、偽り (māyā)、貪り (lobha) である。『真理証得経』で詳細に述べられる<sup>25)</sup>。

baṃdhammi apūraṃte saṃsārabhaoghadamaṣaṇaṃ mojjhaṃ /  
baṃdhaṃ va viṇā mokkhasuhapatthaṇā ṇatthi mokkho ya //1-20//  
束縛に満たされることがなければ、輪廻を恐れが集まりであると見ることは愚かである。束縛がなければ、解脱という快楽を望むことも、解脱そのものも存在しない。

【解説】 世間の人々は輪廻世界に束縛され、恐れ、苦しみを受けている。その束縛による苦しみがあるからこそ、解脱の快楽が希求される。もし快楽を感じることが出来る解脱世界のみしか存在しないのであれば、相対的な感覚である快楽はそれとして感じることはない。輪廻と解脱の両者が必ず必要であることを述べている。

tamhā savve vi ṇayā micchādiṭṭhī sapakkhapaḍibaddhā /  
aṇṇoṇṇaṇissīā uṇa havaṃti sammattasabbhāvā //1-21//  
それ故に、それ自身の主張に束縛されるならば、あらゆるナヤは、誤った見解である。一方で、相互に交じり合った [ナヤ] は、正しさが実在するものとなる。

【解説】 ジャイナ教の相対主義的観点からすれば、どのような見解も、一面的な見方であれば正しいものとはなりえない。相反する両者、あるいは複数の見解が交じり合ってこそ正しい見解として認められうる。

【文献表】

Balcerowicz, Piotr

- 2003 On the Relationship of the *Nyāyāvatāra* and the *Sammati-tarka-prakarāṇa*, *Indologica Taurinensia* 29, 29-79.

Bhatt, B.

- 1978 The Canonical Nikṣepa, Studies in Jaina Dialectics. *Indologia Berolinensis* Band 5, Leiden.

STP *Sammatitarkaprakarāṇa*:

(a) Siddhasena Divākara: *Sammati-tarka-prakarāṇa with Abhayadevasūri's Tattvabodhavidhāyinī*. Ed. by Sukhlāl Saṅghavi and Becardas Doṣī, Ahmedabad, 1924-1931; (vol.1 & 2, RBTS 6-1,2, Kyoto 1984.)

(b) *Siddhasena Divākara's Sammati Tarka with a critical introduction and an original commentary*, by Pandita Sukhlālji Saṅghavi and Pandita Bechardasji Doshi ; translated from Gujarati : Introduction by Prof. A. B Athavle M. A. ; text and commentary by Prof. A. S. Gopani M. A. ; edited by Pandita Dalsukh Malvania, 1939. (repr. *Pt. Shri Sukhalalji granthamala* ; no. 5, 2000)

(c) *Sammai Suttaṃ of Āyariya Siddhasena, edited with Hindi Translation, Explanatory Notes, Introduction, Appendices and Index*, by Devendra Kumār Śāstrī, Neemuch, 1978. (rep. New Delhi ; *Bhāratiya Jñānapīṭh Mūrtidevi-granthamālā*, no. 23, 2003)

108 TBV *Tattvabodhavidhāyinī*, see STP(a).

Upadhye

- 1971 *Siddhasena Divākara's Nyāyāvatāra and with the Vivṛti of Siddharṣi as well as the Text of 21 Dvātriṃśikās and the Sammai-*

*Suttam, Vinayavijaya's Nayakarnikā, Bombay.*

Wiley, K.

2004 Historical Dictionary of Jainism, *Historical Dictionaries of Religions, Philosophies, and Movements*, No. 53.

宇野 惇

1990 「ジャイナ教のナヤ説」『仏教学研究』45.46, 29-50.

原田 泰教

2006 「ジャイナ教における霊魂と解脱——特に多面説の立場から——」『日本仏教学会年報』71, 43-59.

2007 「ジャイナ教の相対主義について」『ジャイナ教研究』13, 33-53.

藤永 伸

1999 Distinguishing the Two Siddhasenas, *Journal of Indian and Buddhist Studies*, Vol. 48, No 1, 567-572.

2001 『ジャイナ教の一切知者論』平楽寺書店.

2006 「ニクシェーバ」『ジャイナ教研究』12, 1-16.

## 注

- 1) シッダセーナの生存年代は現在も確定していない。『聖賢の論理』の最初の校訂者であるSaṅghaviとDoṣiはヴィクラマ暦5世紀と想定している(STP(a) p.16)。また、*Viśeṣāvāsyakabbāṣya*第45偈自註においてジナバドラが『聖賢の論理』2-47を引用していることから、シッダセーナの下限を西暦6世紀とすることが出来る。また、「古層聖典」に言及した記述が『聖賢の論理』2-7等で見られることから、西暦2世紀を上限とすることが出来る(藤永[2001: 77-78]を参照した。)
- 2) 『サンマティ・タルカ・プラカラナ』という書名についても一定していない。版本として出されている書名でみれば、プラークリット名は*Sammāi Suttaṃ*である。サンスクリット名では、*Sammati-tarka*あるいは*Sammati-tarka-prakarana*が使用されている。本書では暫定的に*Sammati-tarka-prakarana* (STP)を使用した。しかし、STP(b) pp.116-120においては、書名を、*Sammati-Tarka-Prakarana* (vol.1-4) から、*Sanmati Prakaraṇa* (vol. 5) に変更したとしている。その理由として①ほとんどすべてのジャイナ教の学者や僧侶が*Sammati*という語を使用していること、②入手可能な写本の中では*Sammati*という名が使われていること、③Yaśovijayaが、この作品の名称として*Sammati*という語を

使用していることを挙げている。また、*Dharaṇajaya-nāma-mālā*という作品の中で、マハーヴィーラの名称のひとつとしてSanmatiという名前が使用されていることも理由としている。

- 3) ジャイナ教の「原始聖典」成立の下限は西暦500年である。また、シッダセーナはクンダクンダ（西暦紀元はじめ頃から200年の間）やウマースヴァーティ（2世紀から7世紀まで諸説）等の「過渡期」論師と時代を同じくしている。藤永 [2001] 第II章を参照のこと。
- 4) 視点法 (naya) は本稿で詳説する内容である。七文陳述法 (saptabhaṅgi) は七つの文を用いて、対象を多角的に記述する方法である。対象は、①ある点では存在し、②ある点では存在せず、③ある点では存在し、かつ存在せず、④ある点では表現されず、⑤ある点では存在し、かつ表現されず、⑥ある点では存在せず、かつ表現されず、⑦ある点では存在し、かつ存在せず、かつ表現されない、という七種である。
- 5) ジャイナ教に特徴的な相対主義のあり方について、サマンタパドドラやハリパドドラ・スーリの著作に基づけば、事物に属する種々の性質を積極的に受け入れるジャイナ教の伝統的相対主義ではなく、他学派との対論を視野に入れた、極端な説を排除するという意味での相対主義であるということが解明された。原田 [2007] を参照のこと。また、聖典期に見られる様々なクシェーパの例については、Bhatt[1978]に詳しく述べられる。
- 6) 『論理学入門』に関する最近の研究として、次のものがある。Jaina epistemology in historical and comparative perspective : critical edition and English translation of logical-epistemological treatises : *Nyāyāvatāra*, *Nyāyāvatāra-vivṛti* and *Nyāyāvatāra-ṭīppana* with introduction and notes / by Piotr Balcerowicz, *Alt- und Neu-Indische Studien* 53. また邦訳として、金倉圓照『印度精神文化の研究』培風館、1944がある。
- 7) 三作品以外にシッダセーナが著したものとして、『救いの宮居の讃歌』（Kalyāṇamandira-stotra）がある。しかし、いずれのシッダセーナに属するかは不確定である。テキスト出版・独訳として、以下のものがある。H. Jacobi, *Zwei Jaina-Stotra*, 2. *Das Kalyāṇamandirastotram*, *Indische Studien* XIV, ss. 376-391.
- 8) 8世紀のジャイナ教学僧ハリパドドラ・スーリは、それまでブラークリットで行われてきた、ジャイナ教聖典への注釈を、初めてサンスクリットで行った人物である。彼はブラークリットとサンスクリット両者に長けており、文学作品を表す際にはブラークリットを使い、哲学作品を表す際にはサンスクリットを用いている。
- 9) 『聖賢の論理』の著者問題については、拙稿『『サンマティタルカプラカラナ』に見られる非絶対論について』（『印度学仏教学研究』第56巻に掲載予定。）も参照のこと。
- 10) Wiley [2004 : 238-239] を参照した。
- 11) 番号の後に\*印を付したものは、Upadhye [1971: 3-4] を元に作成。筆者未見。
- 12) 'śāsanam' dvādaśāṅgam (STP(a) p.1, l.30)
- 13) 〈実体を主とするナヤ〉と〈様態を主とするナヤ〉の原語はそれぞれ、davvatṭhiyanaya, pajjavatṭhiyanayaである。サンスクリットに当てはめれば、dravyārthikanayaと paryāyārthikanayaである。しかし、第3偈の英訳はそのようになっているものの、それ

以外の箇所では、dravyāstikaとparyāyāstikaとなっている。言語的には-arthika- が正しいと思われるが、英訳者が一貫して-astika- を使用しているのは理解できない。

- 14) 『真理証得経』(空1.32; 白1.34) を参照のこと。  
(空) 1.33: naigamasamgrahavyavahārarjusūtrasabdasambhirūḍhaivambhūtā nayāḥ //  
(白) 1.34: naigamasamgrahavyavahārarjusūtrasabdā nayah //
- 15) TSP(c) p.271, 1.19.
- 16) 『真理証得経』(空5.38; 白5.37): guṇaparyāyavad dravyam //
- 17) アバヤデーヴァ自身は白衣派に属し、*Āyāraṅga*と*Sūyagaḍa*以外のすべてのaṅgaに注釈を書いている。
- 18) STP(b) pp.7-8
- 19) テキストはniyama suddhajāioとなっているがniyamaが何の格変化もなしに使用されているのは不自然である。意味上、独立した語として考えることが自然であるが、テキストを再考する余地がある。
- 20) utpādavyayadhrauvyayuktaṃ sat
- 21) STP(a): micchaddiṭṭhī
- 22) STP(a): patteya
- 23) ジャイナ教の相対主義と輪廻思想との関係については拙稿 [2006] を参照のこと。
- 24) 業の存続期間はジャイナ教で認める 8 種の業それぞれによって異なっている。『真理証得経』 8.4 及び15~21偈を参照のこと。
- 25) 『真理証得経』(空8.9 ; 白8.10) を参照のこと。